

昔話「天国の仕立屋」の記述をめぐって

— ヴィクラムのシュヴァンクからグリムのメルヒェンへ —

大 島 浩 英

要 旨

Georg Wickramの滑稽話集*Das Rollwagenbüchlin* (1555) (『車中つれづれ話』) に収められたSchwank „Wie ein schneyder in himmel kumpt und unsers herrgotts fußschämel nach einer alten frauwen härabwirfft.“ (「一人の仕立屋が天国へとやって来て、神様の足台を老婆めがけて投げ下ろした話」) を下敷きにして、グリム兄弟は*Kinder- und Hausmärchen* (1857) (『子供と家庭の昔話』) の中で „Der Schneider im Himmel“ (KHM 35) (「天国の仕立屋」) というメルヒェンを再話した。本論考ではヴィクラムの原文、現代語訳、グリムの再話をそれぞれ比較することによって、初期新高ドイツ語から現代語へと移行する際の音変化、中世高地ドイツ語の影響、書記法の揺れ、不安定な語順と時制表現などが明らかとなり、そしてグリムが再話する際には、登場人物に対してヴィクラムにはなかった独特の性格付けを行いこの話に笑い話的な印象を与えていること、また具体的で詳しい描写や慣用句が増えたことで、本来の口伝えの文体から離れていく様子などが明らかとなった。

キーワード：初期新高ドイツ語、シュヴァンク、グリム童話、昔話、ドイツ文献学

はじめに

グリム兄弟 (Jacob Grimm, Wilhelm Grimm) が蒐集した童話集、*Kinder- und Hausmärchen* (『子供と家庭の昔話』) は1812年に初版が出版されて以来何度も改訂され、1857年に発行された第7版をもって決定稿とされている。この第7版には200話の昔話が収められており、その中の35番目に „Der Schneider im Himmel“ (KHM 35) (「天国の仕立屋」) という話がある。この話は、16世紀のSchwank (滑稽話) 集の一つである

Georg Wickramの*Das Rollwagenbüchlin* (1555) (『車中つれづれ話』) に収められた „Wie ein schneyder in himmel kumpt und unsers herrgotts fußschämel nach einer alten frauwen härabwirfft.“ (「一人の仕立屋が天国へとやって来て、神様の足台を老婆めがけて投げ下ろした話」) に基づいてグリム兄弟が再話したものであるといわれている。本稿では16世紀に書かれたヴィクラムによるSchwankを基本として、この原文のドイツ語表現をGerhard Steinerによって訳された現代語訳と比較しながら、まず16世紀の初期新高ドイツ語テキストと現代語との語法上の差異や問題点を拾い出し、さらにこの話が19世紀のグリム童話集ではどのような形になって再話されているのかということを明らかにしたい。なお、本稿でグリムという場合は主に弟のWilhelm Grimmを指している。

引用文、語形はすべて原文表記のままであるため、語の綴りが現代語とは異なる場合がある。下線、[...] は筆者。

使用テキスト：Wickram, Georg: *Das Rollwagenbüchlin* (1555). Text nach der Ausgabe von Johannes Bolte. (Reclam) Stuttgart 1968. S.180 – 182.

Steiner, Gerhard: *Jörg Wickram · Das Rollwagenbüchlein*. Berlin 1981. S.236 – 238.

Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Band 1, hrsg. von Heinz Rölleke. (Reclam) Stuttgart 1980. S.192 – 195.

I

Wie ein schneyder in himmel kumpt und unsers herrgotts fußschämel nach einer alten frauwen härabwirfft.

(一人の仕立屋が天国へとやって来て、神様の足台を老婆めがけて投げ下ろした話)

ヴィクラムはこの話の表題をkumpt、härabwirfftというようにいずれも現在形の定動詞を用いて現在時制で表現しているが、シュタイナーの現代語訳ではそれぞれkam、herabwarfという過去時制で訳されている。この文は接続詞wieに導かれる副文の表現であるが、*Das Rollwagenbüchlin*に収められた他の話の表題では現在、過去の時制が入り混じって用いられており、時制に関する明確な区別は行われていないものと思われる。また、ヴィクラムは原文でschneiderには不定冠詞einを付け、in himmel kumptではhimmelの前に方向の意味を表わす4格の定冠詞denを省略しているが、これに対してグリムはこの話に „Der Schneider im Himmel“ (「天国の仕立屋」) という表題を付け、ヴィクラムでは不定冠詞が付されていたSchneiderを定冠詞付きに変更し、さらにim Himmelという規定を加えることによってSchneiderの特定性を表現している。

Es hat sich begeben an einem schönen tag, das unser herrgott spatzieren wolt gehen,

unnd nam all seine apostel und heyiligen mit ihm, also daß niemand daheim im himmel blieb dann allein sanct Peter; [...]

(ある晴れた日に神様が散歩をしようと思いいになり、すべての使徒と聖者を連れて行かれたので、天国には聖ペテロただ一人以外誰も残っていなかった。)

ヴィクラムの原文では現代語訳と同様に物語がまず現在完了時制で書き出されており、現在と関連付けながら過去の出来事への導入が意識されているが、これに対してグリムはEs trug sich zu, [...] という過去形で話を書き出し、現在とは切り離された表現を用いている。さて語順については、Es hat sich begeben [...] で過去分詞begebenが文末へ移動していないため枠構造が不完全となり、また [...] spatzieren wolt gehen, [...] (現代語訳: [...] spazieren gehn wollte [...]) ではdasに導かれる副文内でwoltが後置されておらず、さらにそれに続くnamでも同様の現象が見られるため、このテキストでは定動詞後置がまだ未整備の状態にあると言える。語末音消失もヴィクラムでは頻繁に見られ、ここではwoltの語末音 e が脱落している。さてこの箇所について、グリムではspatzieren wolt gehenをsich ergehen wollte (「逍遙する」) と雅語を用いて書き直し、異なった位相の表現を与えている。また、前置詞mitに続くihmはこの場合herrgottを受けしており、現代語では再帰代名詞sichを用いるところが人称代名詞で代用されていることから、両者の使い分けがまだ定着していない段階にあることがわかる。²⁾次に、daß文内のniemandは主語として機能しており現代語では1格にされるが、ヴィクラムの原文ではこれが2格で用いられているため、これは数量を表わす語を伴わず単独で用いられた部分の2格であると考えられる。³⁾また、現代語ではniemandと呼応して使われる「～以外」を表わすalsは、ヴィクラムの原文ではdannという別の語で表現されている。

さてヴィクラムはこの話に登場する聖人Peterに対し、聖者であることを表わすためにsanctという語を付してsanct Peterと記しているが、グリムはこれをder heilige Petrusとしてゲルマン語系の表現に書き改めている。なお、神を表わす語としてヴィクラムはunser herrgottを用いているが、これに対してグリムではまず最初の行でder liebe Gott (「親愛なる神」) と表現し、それ以降はder Herr (「主」) という語を使用している。

[...] ; dem befalch er, daß er gedächte^e und niemand⁴⁾ eynliesse, dieweyl er auß wer, unnd zoch also darvon.

(ペテロに神様は、自分が外出している間は注意して誰も中へ入れないようにと命じて、それからお出かけになった)

ここではbefalchにおいて、mhd. bevelhenの1、3人称単数過去形bevalchという、中世高地ドイツ語の語形がほぼそのままに残っており、またziehenの3人称過去形zochには文法の子音交替が見られるなど、初期新高ドイツ語への移行段階における中高ドイツ語の影響が見て取れる。また、werの語尾にもeの語末音消失が起こっている。

さてグリムはこの箇所を、Der Herr hatte ihm befohlen, während seiner Abwesenheit niemand einzulassen.と表現して、「神の不在中には誰も中へ入れないように」と命令する内容をzu不定句を用いて簡潔な表現に変え、そしてこの文全体を過去完了時制で表現することによって、神様が使徒や聖人たちを引き連れて散歩に出かける前の時点でこの命令がなされた、という時間的なずれをうまく表現している。

Nun kam ein schneyder ⁵⁾für den himmel; der klopfet an. Sanct Peter fraget, wer da wer und was er wölte. Der schneyder sagt: „Ich bin ein schneyder und wölt gern in himmel.“ (そこへ一人の仕立屋が天国の前へとやって来て、門を叩いた。聖ペテロは、そこにいるのは誰か、何が望みかと尋ねた。仕立屋は言った。「私は仕立屋で、天国に入りたいのです。」)

ここでは前置詞fürが現代語のvor「～の前」という意味で用いられており、ü→oへの母音変化が見られる。また、yはiと同じ音価として用いられており、schneyder, dieweylなど語中で二重母音の一部として現れるが、不定冠詞einには現れていない。次に動詞の変化語尾については、klopfet, fragetで過去形語尾-teが-etとなり、英語の-ed型と類似した形態となっている。またwer, sagt, wöltではいずれも過去形語尾にeの語末音消失が見られるが、eの脱落が起こっていないwölteも並存しており、語末音の消失現象にも揺れが見受けられる。

さてここで、ペテロの問い掛けに対してヴィクラムでは„Ich bin ein schneyder“と自らの職業のみを答えているが、グリムでは„Ich bin ein armer ehrlicher Schneider“, antwortete eine feine Stimme, [...]”というように、「貧しく、正直な」、「か細い声」といった仕立屋自身についての性質が述べられ、仕立屋の性格付けがなされることで登場人物の印象付けが行われているように思われる。さらにグリムは、„[...] , du hast lange Finger gemacht und den Leuten das Tuch abgezwick.“ (「おまえは手癖が悪くて、人の布地を切り取って盗んでいるではないか」)とペテロが仕立屋を非難する発言を挿入しており、ここでも仕立屋の犯罪歴、人物像が述べられることによって強い性格付けがなされている。この仕立屋は天国に入ることを拒否されるが、留守中に天国には誰も入れなという神様の言い付けだけがその理由ではなく、この仕立屋の罪もまた天国に入れない理由として付け加えられている。

Sanct Peter sprach: „Ich darff niemands eynlassen. Dann unser herrgot ist nit daheimen, und wie er hinweggieng, verbot er mir, ich solt gedencken unnd niemands eynlassen, dieweyl er auß wer.“

(聖ペテロは言った。「私は誰も中へ入れてはいけない。というのは神様がご不在だからだ。そして神様がお出かけになる時、神様の外出中は注意して、誰も中へ入れないようにと神様は私に命じられたのだ。」)

ここで、神様が散歩に出かける際に、「留守中は誰も中へ入れるな」とペテロに命じる箇所ではverbot「禁止する」という語が用いられている。この語の後には、「ペテロが注意して、神様がいない間は誰も中へ入れてはならない」という内容の文が続くため、これでは「留守中に誰も中へ入れてはならない」ことを禁止するという意味になり、意味的に矛盾が生じるように思われる。これに対してシュタイナーの現代語訳ではgebot (<gebieten)「命じる」という語が用いられており、これで意味的な矛盾は解消されている。従って、ヴィクラムは「誰も中へ入れてはならない」という禁止の意味をさらに強調するためにverboten「禁じる」という語を重ねて用いたと考えられる。グリムはこの箇所に対して、„der Herr hat mir verboten, solange er draußen wäre, irgend jemand einzulassen.“（「主は私に、ご自分が留守にしている間、誰かを中へ入れることを禁じられたのだ。」）と表現し、verboten（「禁じる」）という語を使いながらも論理的に矛盾しない文に書き改めている。

さて語法面では、理由を表わす接続詞dennの代わりにdannが用いられて両者が混同されており、また、古い従属接続詞diuewylに対してグリムではsolangeが、さらにauß（外出中）に対して現代語訳ではfort、グリムではdraußenがそれぞれ対応しており、各版で表現の違いが見られる。

Aber der schneider ließ nit nach sanct Petern ⁶⁾ zu ^o bitten und bewegt in mit seinem langen bitten dahin, daß er ihn verwilliget hineynzelassen, [...]

（しかしその仕立屋は聖ペテロにしつこく頼み込み、仕立屋の執拗な懇願に仕方なくペテロは仕立屋が中へ入ることを許した。）

ここではschneider内の二重母音はeyではなくeiと記述されており、また人称代名詞ではinとihnが、さらにzuが語中ではzeとしてそれぞれ並存し、表記の揺れがここにも見られる。また、verwilliget (<verwilligen) という語形は現代語では使用されないため現代語訳ではeinwilligen（「承諾する」）がこれに対応し、前つづりver-とein-との交替が行われている。

さてヴィクラムでは、仕立屋がペテロに対して天国に入れてくれるようにしつこく懇願した、という記述だけで仕立屋は天国に入ることを許されているが、グリムではここに仕立屋の、「自分は足を引きずって歩き („Ich hinke, [...]“)、そのため足にまめができてしまってもう引き返すことはできない」といった同情を引く発言を挿入し、さらに、alle schlechte Arbeit tun（「どんないやな仕事もする」）、die Kinder tragen（「子供たちの世話もする」）、die Windeln waschen（「おむつを洗う」）、die Bänke säubern und abwischen（「ベンチを拭き掃除する」）、ihre zerrissene Kleider flicken（「子供たちの破けた服も繕う」）、など具体的な発言内容を挿入し、天国に入るためなら何でもやるといった仕立屋のひょうきんな姿勢を描き、笑い話的な性格付けを行っている。

[...], doch mit dem geding⁷⁾, er solte in einem winckel hinder der thürenn fein züchtig unnd still sitzenn, damit, wenn unser herrgott keme, daß er seinen nit warneme unnd zornig wurde.⁸⁾ Das verhiess er im.

(しかし、神様が戻られた時、仕立屋に気付いてお怒りにならないように、仕立屋は扉の後ろの隅におとなしく静かに座っていること、という条件付きだった。仕立屋はペテロにそれを約束した。)

ここに現れたthürenn (単数 3 格) , unnd, sitzennといった語にはすべて n の重ね書きが見られ、thürennについては別の箇所でも、いずれも単数 4 格でhinder die thürenあるいはhinder die thürという異なった表記もなされており、この語についても書記法に揺れが生じている。目的を表わす従属接続詞damitに導かれる副文内では、さらに「～すること」を表わす従属接続詞daßが重ねて挿入されているが、現代語ではこのdaßは省略されdamitのみで用いられる。また、warnemeの目的語として現代語訳では人称代名詞erの 2 格seinerで表現されるところが、ヴィクラムの原文ではseinenという形式を取っており、ここには指示代名詞derの 2 格dessenの語尾との類似性を見ることができる。

さてグリムでは仕立屋を天国に入れてやる際に、aus Mitleiden (「同情心から」) というペテロの心情の描写や、仕立屋に関してはdem lahmen Schneider (「足の悪い仕立屋」)、mit seinem dürrn Leib (「やせ細った体」) といった描写を加え、ここでも登場人物に具体的なイメージを与えている。また、天国の門の開け方についても、Der heilige Petrus [...] öffnete [...] die Himmelsporte so weit, daß er [...] hineinschlüpfen konnte. というように、「聖ペテロは、仕立屋がぎりぎり入れるだけの幅しか天国の門を開けなかった」という描写がなされており、状況に緊張感と視覚的印象が付加されている。⁹⁾

II

Also satzt er sich hinder die thüren in ein winckel, unnd sobald sanct Peter für die thür hinaußgehet, steht der schneider auf und geht inn allen wincklen im himmel harumb und besicht eins nach dem anderen.

(そして仕立屋は扉の後ろの隅に座って、ペテロが扉の前へ出て行くやいなや立ち上がって天国のあらゆるところを隈なく歩き回り、次々と見て回った。)

天国に入った仕立屋が天国を隅々まで見て回る際に、グリムではvoll Neugierde (「好奇心いっぱい」) ということばを付け加え、仕立屋の無邪気な性格を表現している。

さてここでは、まず再帰動詞satztの語末音 e が消失しているが、さらに現代語の過去形ではsetzteとなるべきところが原文では逆ウムラウトしたままの形であり、母音交替がまだ進んでいない状況が見られる。またヴィクラムの原文ではこれまですべて過去時

制で物語が記述されてきたが、*hinaußgehet*, *steht*, *geht*, *besicht*では現在形動詞での表現に移行している。現代語訳ではこれらの箇所もすべて過去形動詞で表現されているため、ヴィクラムはここで情景をありありと描写するために、歴史的現在を用いたのかもしれない。

Zuletzt so kumpt er zu vilen schönen und kostlichen stulen, under welchen in der mitte ein gantz guldiner sessel stund, darinn vil kostliches edelgesteins versetzt was; [...]

(最後に彼は、たくさんの美しい高価な椅子があるところへやって来た。それらの椅子の真ん中にはすべてが金でできた安楽椅子が置いてあり、その椅子の中には高価な宝石がちりばめられていた。)

さてここでも現在形動詞*kumpt*を用いた記述がなされているが、この後からは*stund*, *was*というように過去形での語りとなり、客観的表現に戻っている。また、*sessel* (「安楽椅子」) を修飾している形容詞*guldiner*は現代語では*goldener*となるように、舌の位置が下がって *u* → *o*, *i* → *e* へと母音に変化する *Senkung* の現象がここには見られる。

数量を表わす語を伴わない部分の2格についてはすでに触れたが、*vil kostliches edelgesteins*では数量を表わす*vil*が名詞として添えられ、これに*kostliches edelgesteins*が部分の2格としてかかる現象が見られる。また、動詞*versetzt*の前綴りに関しては、現代語訳では基礎動詞*setzen*の過去分詞としての*gesetzt*、グリムでは [...] mit glänzenden Edelsteinen besetzt war (「輝く宝石をちりばめた」) というように*ver-*, *ge-*, *be-*がほぼ同様の状況を描写する前綴りとして現れており、*ver-*が独自にもっている意味変形作用はここでは見られない。

[...] ; er was auch vil höher dann der anderen stül keiner, vor welchem auch ein guldiner fußschämel stund; auff demselbigen sessel saß unser herrgott, wenn er daheim was. Der schneyder stund still vor dem sessel ein gute weilen und sahe in stätigs an; dann er im am allerbasten¹¹⁾ under den anderen gefiel.

(その椅子は他の椅子のどれよりもずっと高く、その前には金の足台もあった。神様がおられる時はその椅子にお座りになるのだ。仕立屋はこの安楽椅子の前にしばらく立って、それをじっと眺めた。というのは、その椅子が他の椅子の中でも最も仕立屋の気に入ったからだ。)

さてここでは、原文の*vil höher dann der anderen stül keiner*という表現に対して、グリムは*viel höher als die übrigen Stühle* (「他の残りの椅子よりもずっと高い」) というように*dann*を*als*とし、また*keiner*にかかるザクセン2格といった回りくどい表現を避けて、読みやすい文体に書き改めているのがわかる。語法面では、*ein gute weilen*で、まず*ein*に*e*の語末音消失が見られ、また*weilen* (4格) では前述の*hinder der thüre* (3格) と同様に、現代語では*Tür* (あるいは方言で*Türe*)、*Weile*となるべきところがそれ

ぞれ女性名詞で *n* の語尾が添えられている。動詞 *sahe* では、3 人称単数過去形の不規則変化動詞の語尾にも、規則変化動詞の過去形語尾の影響を受けた *e* が現れている。また、理由を表わす *dann* は現代語の *denn* に相当するが、現代語の *denn* が並列接続詞として語順に影響を与えないのに対して、ここでは従属接続詞として用いられて定動詞 *gefiel* が後置されている。

Also geht er hinzu und setzt sich inn den sessel. Wie er nun also sitzt, sieht er nid sich und sieht alle ding, was auff erden geschicht. Under anderem aber ersicht er ein alte frauen, welche irer nachbeürin ein underband garn stilt. Darvon dann der schneyder erzürnet, nimpt den guldinen fußschämel und wirfft den nach der alten frauen durch den himmel auff die erden hinab.

(それから仕立屋はこの安楽椅子に歩み寄り、その中へ座った。彼が座っている間眼下を見下ろし、地上で起こっていることのすべてを見た。とりわけ、隣の女から一束の糸を盗んだ一人の老婆が見えた。それに腹を立てた仕立屋は金の足台をつかんで天国から地上の老婆めがけて投げつけた。)

この部分では再度、*geht*, *setzt*, *sitzt*, *sicht*, *sicht*, *geschicht*, *ersicht*, *stilt*, *erzürnet*, *nimpt*, *wirfft* のすべての動詞が現在形で現れており、基本的に過去形で語られて来たこの話がここに来て再び現在時制へと移行している。前述の箇所でも同様のことがあったが、語り手の意識が自然に変化して写実的な描写へと移行した歴史的現在か、あるいは目で読む話よりも、語って聴かせる話という意識が働いた結果なのかもしれない。

次に副詞 *nid* は mhd. *nider* 「下へ」が省略された形と考えられ、ここでは人称代名詞ではなく再帰代名詞を伴った *nid sich* が「眼下に」という意味合いで用いられているが、現代語ではこの部分を *unter sich* と前置詞句で表現している。また、*auff erden* でも女性名詞 3 格で *thürenn*, *weilen* と同様、語尾に *n* が付加されている。関係代名詞の用法では、*was* がその前の先行詞 *alle ding* を受ける不定関係代名詞として機能しているが、現代語訳では *alle Dinge, die [...]* となり定関係代名詞が用いられているため、不定関係代名詞の適用範囲が初期新高ドイツ語では現代語より広がったものと思われる。

さてこの箇所でグリムは、仕立屋が神様の安楽椅子に座る際の描写に *den Vorwitz nicht bezähmen* (「好奇心を抑えられずに」) という表現を付け加え、ここでも仕立屋の性格付けを行っている。そしてこの仕立屋が神様の安楽椅子に座って下界を見下ろしそこに見たものは、ヴィクラムではある老婆が隣の女から一束の糸を盗む様子であったが、グリムでは小川で洗濯をしている老婆が二枚のベールをわきへくすねる ([...] *zwei Schleier heimlich beiseite tat*) という場面が変わっており、ここに一枚ではなく二枚のベールを盗む欲深さが強調されているだけでなく、さらに老婆を *eine alte häßliche Frau* と表現して「醜い」という評価を加えていることから、ここにグリムの女性蔑視

の姿勢を指摘する意見もある。¹²⁾ またこのことは、ヴィクラムのnach der alten frauen「老婆に向かって（足台を投げつける）」という表現をグリムがnach der alten Diebin「年老いた泥棒女に向かって」という露骨な表現を用いているところにも見受けられる。

Do nun der schneider den schämel nit mer erlangen mocht, schlich er hüpschlich auß dem sessel unnd satzt sich wider hinder die thür an sein altes örtlin und thet dergleychen, als wenn er nirgends da gewesen wer.

（さて仕立屋はもはや足台を手に入れることはできないので、椅子からそっと下りて再び扉の後ろのもいた場所に座り、どこにも行かなかったかのようなふりをした。）

これまで現在形で書かれていた文章がここからは、schlichや逆ウムラウトを起こしているsatztといった動詞の形を見てもわかるように、再び本来の過去形に戻って話が客観的に記述される。また、現代語のtäte, wäreにそれぞれ対応するthet, werは接続法2式の形態ではあるが語末音のeが脱落している。さらに、nirgends daという場所の記述に対して現代語ではnirgends sonstとして、「他のどこへも行かなかった」ことが強調されている。さてこの部分に対応するグリムの記述では、als ob er kein Wasser getrübt hätte「まるで水も濁さなかったかのように（＝気が弱くて悪いことは何もできない）」といった慣用句が用いられているが、口伝えの昔話では本来このような言い回しは使われないといわれており、読み物としての性格がここに表れていると考えられる。¹³⁾

III

Als nun unser herrgott wider heimkam, ward er des schneyders nit gewar; wie er sich aber inn seinen sessel setzt, manglet er seines schäfels. Also fragt er sanct Peter, wo sein schäfel hinkommen sey. Sanct Peter sagt, er wüßte es nit.

（さて神様がお帰りになられた時、神様は仕立屋に気付かなかった。しかし神様が自分の椅子に座られた時、足台がなかった。そこで神様は聖ペテロに、足台はどこへ行ったのかとお尋ねになった。聖ペテロは存じませんと言った。）

さてここで、神を表わす表現としてヴィクラムではunser herrgottと表現するのみにとどめているが、グリムは前述のder liebe Gott（「親愛なる神様」）に加えて、der Herr und Meister（「支配者たる主なる神」）がmit dem himmlischen Gefolge（「天国のお供を引き連れて（帰ってくる）」）といった表現を用いており、これによって神の絶大さが意図的に強調されキリスト教的色彩が強められているように思われる。

この段落はheimkam, wardなどの過去形動詞で書き出されており、これに続くsetztは逆ウムラウトしていない形で語末音のeが脱落した過去形動詞として、同様にfragt, sagtも語末音消失した過去形動詞と考えるのが妥当と思われ、従ってこの部分は過去形

での記述がなされているものと考えられる。またmangletも現代語の規則変化動詞mangelnの過去形mangelteに対応するものだが、ここでは「人」を1格の主語にして、2格目的語を取る古い表現がなされている。これは現代語であれば2格目的語を1格の主語、「人」を3格として、[...], mangelte ihm sein Schemelといった文で表現される。

さて次に、「足台はどこへ行ったのか」という部分のhinkommenは完了形の過去分詞で用いられたもので、従ってhingekommenというように現代語訳及びグリムでも前綴りgeが付加されているが、ヴィクラムでは過去分詞にこの前綴りgeが見られない。前綴りgeは動作の完結を意味するため現代語では過去分詞の目印のように添えられるようになったが、本来から完了相の意味をもつ動詞の過去分詞には古高ドイツ語、中高ドイツ語ではgeが付加されなかった。その影響が16世紀のこの文献にもまだ見られるものと思われる¹⁴⁾。

Do fragt er weyter: „Wär ist da gewesen? Hast niemand häreyngelassen?“ Er antwort und sprach: „Ich weiß niemandt, der hinnen ist gewesen, dann ein schneyder, der sitzt noch da hinder der thüren.“ Do fraget unser herrgott den schneyder und sprach: „Wo hast mir mein schämel hingethon? Hast du ihn nicht gesehen?“¹⁵⁾

(さらに神様はお尋ねになった。「誰かがここにいたのか。おまえは誰かを中へ入れたのか。」ペテロは答えて言った。「そこの扉の後ろにまだ座っている仕立屋以外には、天国の中にいた者は誰も知りません。」そこで神様は仕立屋に尋ねて言った。「おまえは私の足台をどこへやったのか。おまえはそれを見なかったか。」)

„Hast niemand häreyngelassen?“ という文では主語のduが省略されており、この現象は „Wo hast mir mein schämel hingethon?“ にも見られる。hastという人称変化した動詞形から主語が特定できるため主語が省略されたものと思われるが、現代語にも見られるhast duの縮約形hasteの語末音が消失したものとも考えられる。またantwortでは語末音のeのみならず、過去形の語尾-teそのものが脱落している。次にniemandt, der hinnen ist gewesen, dann ein schneyderでは、niemandtに「～以外」を表わすdannが呼応しているが、現代語ではdannに代わってalsが用いられる。またderに導かれる関係文の中で現在完了の助動詞istが後置されておらず、定動詞後置がここでもまだ不完全な状態にあることがわかる。

さてこの箇所でグリムは仕立屋に対してein lahmer Schneider「足の悪い仕立屋」という表現をしており、前述の „Ich hinke, [...]“ (「私は足を引きずっています」) と同じように、lahmという語を挿入することで仕立屋の特徴付けを再度行っている。またグリムは、Da fragte er weiter, ob er jemand hereingelassen hätte. (「彼(神様)は彼(ペテロ)が誰かを中へ入れたのかどうかをさらに尋ねた。」、[...] und fragte ihn, ob er den Schemel weggenommen und wo er ihn hingetan hätte. (「そして、彼(仕立屋)が足

台を持っていったのどうか、また足台をどこへやったのか、と（神様は）尋ねた。）などのように間接話法を用いているが、ヴィクラムはこれらを直接話法で表現しているため、ヴィクラムの方が素朴でわかりやすい、語りに適した文体と見ることができる。そして、命令を守らず神の留守中に仕立屋を天国に入れてしまったペテロを、神は非難することもなく話が進んでいくという緊張感のなさ、これについてはグリムでもここでペテロと仕立屋を叱るというエピソードを加えず、何らの決着をつけることなくこの件を素通りして話を進めているが、こういったメリハリのなさがこの話を印象に残らないもの¹⁶⁾にしていると小澤は指摘している。

Der schneider erschrack, gab mit forcht unnd zitteren antwort und sprach: „Ich bin¹⁷⁾ in deinem sessel gesessen und hab gesähen, wie da unden auff erden ein alte frauw irer nachbeürin ein underband garn gestolen hat; darab ich erzürnet bin worden unnd hab den fußschämel nach ir geworffen.“

（仕立屋は驚き、恐れ震えながら答えて言った。「私はあなたの安楽椅子に座り、下の地上で一人の老婆が隣の女から一束の糸を盗む様子を見たのです。それに私は腹を立てて、足台を老婆めがけて投げつけました。）」

この部分ではgab [...] antwortという、現代語においてよく現れる動作名詞を伴った機能動詞の表現が、初期新高ドイツ語で書かれたこの文献にも見られるという点は興味深い。さて、神様に問い質された仕立屋は、ヴィクラムでは驚きmit forcht unnd zitteren（「恐れ震えながら」）答えるのだが、これに対してグリムではfreudig（「うれしそう」）に答えるとなっており、これらは全く正反対の反応ではあるが、グリムのようにfreudigとすることによって仕立屋の無邪気で喜劇的な性格の印象付けがここでもなされているように思われる。語法面では、[...]; darab ich erzürnet bin worden [...] という箇所において、darabが従属接続詞のように感じられたのか完了の助動詞binがdarabに続く第2番目に置かれず、また完全に後置もされていないという統語上の未整備さが見られる。

Do ward unser herrgott zornig über den schneyder und sprach: „Hey, du schalck, solt ich so manchs mal ein schämel nach dir geworffen haben, als oft du ze vil geren geschnitten und ins aug geschoben hast, ich hette weder stül noch bänck mer im himmel.“

（すると神様はこの仕立屋に腹を立てて言った。「おい、このいたずら者め。おまえが多くの端切れを切り取って仕立て台の隙間に押し込むたびにおまえに足台を投げつけていたら、天国には椅子もベンチもなくなってしまうだろう。）」

この部分では、「その時」を表わすdoが現代語ではdaとなり母音に変化が生じており、また原級比較の現代語so～wieの対応はヴィクラムではso～alsで表わされている。またsolt（語末音消失）から始まる文はwennが省略された副文であるため、これに続く主文

は定動詞が倒置されるはずであるが、ここでは認容文のようにich hette [...] と定動詞が正置されたままの語順で表現されている。

さてここでは、als oft du ze vil geren geschnitten und ins aug geschoben hast (「おまえがたくさんの布切れを切り取って、仕立て台の隙間に押し込むたびに」) という記述が見られ、ヴィクラムのテキストではここで初めてこの仕立屋にも盗みの罪があるということが明らかにされる。この箇所に対応してグリムは、Ich hätte schon lange keine Stühle, Bänke, Sessel, ja keine Ofengabel mehr hier gehabt, sondern alles nach den Sündern hinabgeworfen. (「とうの昔に椅子もベンチも安楽椅子も暖炉の火かき棒さえもはや私のところに無くなるどころか、すべてを罪びとたちに投げつけていただろう。」) という記述をして、その中で仕立屋や盗みを働いた老婆を「罪びと (Sünder)」という宗教的色彩を帯びた言葉で総括し、さらにHier soll niemand strafen denn ich allein, der Herr. (「ここでは主なる神である私以外、誰も人を罰してはならないのだ。」) という発言を付け加え、ここに一般化された形でキリスト教的教訓を挿入しているように思われる。

IV

Also ward der schneyder für den himmel hārauβgestossen und ihm sein brāsten unnd mangel auch entdeckt und ans liecht hārfürgezogen worden. Es ist auch zū besorgen, man finde deren noch vil yetz zū unseren zeyten, so einen, der in einem laster kaum eins strohalms tieff steckt, rechtfertigen und straaffen wōllen, unnd aber sy gar darinn ersoffen sind.

(こうして仕立屋は天国の前へ追い出され、彼の欠陥も欠点も暴かれて明るみに出された。心配すべきことは、ほんの少しの罪を犯した者を非難し処罰しようとするくせに、自分自身は悪事にどっぷりとつかっている者が昨今の世の中にも多く見受けられるということだ。)

この段落では、für den himmel hārauβgestossenという部分でも前置詞fürが現代語のvorに対応して用いられているが、さらにこの箇所でのhārauβgestossenが現代語訳ではhinausgestoßenとなり、本来「こちらへ」という意味を表わすhārがここではhin「あちらへ」と混同されて用いられているものと思われる。このことは現代語のraus (「外へ」) が、hinausとheraus両方の意味で用いられていることからわかる。また、und ihm [...] hārfürgezogen wordenの文では、受動文の完了形を表わす完了の助動詞sindが省略されている。

さて最後に仕立屋は天国から追放され、さらに彼のbrāsten unnd mangelも暴かれて

明るみに出されることになるが、ここではbråsten（現代語ではGebrechen）という「(身体的) 欠陥、障害」を意味する語が用いられ、これが明らかとなると述べられていることから、グリムではすでに何度か言及されていた仕立屋の足が不自由であることが、ヴィクラムでは最後になって暗示されているように思われる。この箇所に対応してグリムは、Petrus mußte den Schneider wieder hinaus vor den Himmel bringen（「ペテロは仕立屋を再び天国の門前へ連れ出さねばならなかった」）と書き改め、仕立屋に天国の中へ入ることを許したペテロ自身が自分の責任において仕立屋を再び外へ連れ出すことで、自己の過失の後始末を自らが行って決着をつけるという結末を設定したものと考えられる。

また語法面では、deren noch vil（「昨今の世の中にも多く見受けられる人々」）を受ける関係代名詞がここではsoで表現されており、これは現代語の定関係代名詞dieとしてここでは機能している。そして最後の文に現れたaberについては、この接続詞に導かれる文の定動詞が後置されており、従って現代語では語順に影響を与えない並列接続詞aberが、この文では従属接続詞的に用いられていることがわかる。

おわりに

さてヴィクラムは、上記のような教訓をこの話の末尾に配置することによって読者に道徳的な戒めを与えているのだが、グリムの再話では次のようなエピソードでこの話を締め括っている。

[...], und weil er zerrissene Schuhe hatte und die Füße voll Blasen, nahm er einen Stock in die Hand und zog nach Warteinweil, wo die frommen Soldaten sitzen und sich lustig machen.

ここでは、天国に入ることがまだ許されない者の代表のようにdie frommen Soldaten（「敬虔な兵隊たち」）が登場し、彼らが楽しく過ごしている場所をWarteinweil（「ちょっと待て」）という名の村があるいは宿屋に見立て¹⁸⁾、そこへまめだらけの足にぼろぼろの靴を履いて、杖を手にした仕立屋が向かうという場面が付け加えられている。これによってグリムは、昔話によく見られるような教訓的結末を避け、読者を天国から現実的な日常に引き戻すことで、この話をより親しみやすいものに行っているように思われる。

注：

- 1) 小澤俊夫『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』朝日新聞社 1992年 191頁

- 2) グリムではこの部分をmitnehmenという分離動詞で表現している。
- 3) 工藤康弘・藤代幸一『初期新高ドイツ語』大学書林 1992年 118頁
- 4) frnhd. gedenckenの接続法2式gedächteはここでは「考える、思う」という意味ではなく、aufpaßte（注意を払う）という意味で用いられている。
- 5) 男性4格の定冠詞denはfür den himmel, durch den himmelにはあるが、前置詞inではin himmelのように省略される傾向が見られる。
- 6) 男性4格で用いられているPeterに語尾nが付加されている。
- 7) Bedingung (Lexer)
- 8) 現代語の接続法2式würdeに対応し、原文ではウムラウトの表記が脱落したとも考えられる。
- 9) 昔話では限界の状況でストーリーを進めることが好まれる。(小澤俊夫 前掲書 196～197頁)
- 10) 文法的子音交替で現代語のwarに対応。
- 11) nhd. allerbesten
- 12) 小澤俊夫 前掲書 208頁
- 13) 小澤俊夫 前掲書 212～213頁
- 14) 大島浩英 「ドイツ語前綴りge-の変遷について」(大手前女子短期大学「研究収録」第15号 1995年 87～88頁)
- 15) このテキストでは否定詞nitが6箇所、そしてnichtの形はこの1箇所にのみ現れ、語形がまだ定着していない。
- 16) 小澤俊夫 前掲書 217～218頁
- 17) ヴィクトルの原文では南部方言でsitzenをsein支配の動詞として扱っているが、現代語訳では完了の助動詞にhabenを用いている。
- 18) Warteinweilに対して小澤俊夫は「しばし待て屋」(前掲書 224頁)、金田鬼一は「ちよいと待って屋」という訳語をそれぞれ与えている。(金田鬼一(訳)『完訳 グリム童話集(一)』岩波書店 1979年 350頁) また、グリムのドイツ語辞典にはこの項目の中でBrentanoからの引用として次のような説明が記されている。„ein ... dorf ..., das liegt zwischen hölle und himmel und ist ganz neutral, es heisst warteinweil“ (「地獄と天国の間に位置し、全く中立的な村、それはwarteinweilと呼ばれる」) (Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv '84) Bd.27. S.2124.

上記以外の参考文献：

- イェルク・ヴィクトル (著) 名古屋初期新高ドイツ語研究会 (訳)『道中よもやま話』講談社 2001年
- 伊東泰治 他 (編著)『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社 2001年
- ヤーコプ・グリム／ヴィルヘルム・グリム (高木昌史／高木万里子 編訳)『グリム兄弟 メルヘン論集』法政大学出版会 2008年
- ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム (野村滋訳)『完訳グリム童話集 2』筑摩書房 2005年
- Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
- Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38.Aufl. Stuttgart 1992.
- Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002.
- Rölleke, Heinz: Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung. (Reclam) Stuttgart 2004.